

山内清男の加曾利E式土器と「^{なかびょう}中峠式土器」

大村 裕

はじめに

縄紋土器の研究に限ったことではないが、科学研究において必要なことは、まず研究対象の定義をはっきりさせることである。個々の土器型式の定義をはっきりさせなければ、共通の「土俵」に上がって議論は出来ない。このシンポジウムの俎上にのぼっている「加曾利E式」における細分の研究状況はその最たるものであろう（別添の大村発表資料参照）。次に必要なことは、自らの調査（実験）データを提示して、他者の追認が可能になるような手続きをしておく必要がある。かつての下総考古学研究会が取り組んだ、「中峠式土器」の研究（1976年）は、そのことをかなり意識しながら推進したものであった。

「Pre 1式」仮説（「勝坂式・阿玉台式にも後続の加曾利E I式にも当てはまらない漸移的土器型式の存在」）のもとに松戸市中峠遺跡の学術調査を長年にわたって推進し、第4次・第5次調査においてその層位的根拠の一端を突き止め、学史的検討から「中峠式」成立の必然性も解き明かしている。そして研究の見通しが立った段階で、その分布状態も組織的な既出資料検索によって明らかにした。こうした手順を踏んだ上で標準資料の鮮明な写真を添えて新型式の提唱を行なったのであった（下総考古学研究会、1976）（註1）。

このように、下総考古学研究会による新型式（中峠式）提唱は、まさに理想的な手順を踏んで行なわれたものであったが、その正式な公表の前後から数多くの研究者による批判が展開され（本稿末尾の参考文献参照）、あまつさえ1998年には下総考古学研究会によって「型式」としての「中峠式」は撤回されるに至ったのである（註2）。「中峠式土器」研究の、どこに問題があったのであろうか。この点について、本シンポジウムの主題（「加曾利E式土器」）に絡めながら、以下に若干の解説を行ないたい。

1. 「中峠式土器」設定が生まれた背景（山内清男による縄紋土器型式の細別と大別の原理から）

縄紋文化研究の基盤を構築した山内清男による縄紋土器型式研究の原理は、海外の方法論を直輸入したものではなく、明治時代以降蓄積されてきた本邦先史考古学の研究成果を踏まえた独特のものであった。すなわち、広義の「諸磯式」、「厚手式」（陸平式）、「薄手式」（大森式）、「出奥式」（亀ヶ岡式）などと呼ばれていた大まかな分類群の中から、主に東日本における精密な層位的発掘の所見を基礎にして（前期～中期は宮城県大木冨貝塚、晩期は岩手県大洞貝塚等）、数多くの細別型式を抽出し、その成果を土台にして未知の古い土器群（尖底土器群）を探索していったのである。そしてさらに、「関東北」の編年を基準にして全国の縄紋土器諸型式を短期間に体系化したのであった（詳細は大村、2014;2022aを参照のこと）。その折に心がけたのは、「離散的存在」（中間がなく、他とはっきり線が引けるもの）に注目したことである。複雑な縄紋土器を型式分類し、全国的に体系化するために、これは必須の条件であった（註3）。従って、山内が抽出した土器型式と隣接する土器型式には「隙間」が存在する。しかし、その隙間を埋める「中間的存在」を次々に拾ってゆくと、分類体系が破綻し、ついに縄紋土器型式の区別がつかない状況になってしまう可能性がある。分類学では、「離散的存在」に注目することが原則になっているのである（馬渡、1994：7頁）。

次に山内が心がけたのは、異系統型式が折衷する土器は除外するということである。第1図を見て頂きたい。これは杉原荘介（1940）が提示した加曾利E式土器群の一部であるが、No.2とNo.5は『日本先史土器図譜 第IX輯 加曾利E式』（1940年）に収録しているものの、最も優品と評価されるNo.1は、山内は標準資料から排除しているのである。なぜであろうか？ 口頸部の文様帯は確かに加曾利E式（古）であるが、体部は沈線文様が横位に展開する大木8式（東北南部に主に分布する並行型式）の特徴を持つものである。この個体を標準資料に加えると、大木8式との区別が困難になるので、あえて選定から外したのだと推定されるのである（大村、2022b 参照）。このように、山内清男は各地から出土した特徴的な土器群を「標準資料」として「飛び石」的に土器型式を設定していたのであった。くだんの「中峠式」は、勝坂式とも阿玉台式とも加曾利E式とも区別のつかない中間型式であり、山内がこれを見せられたならば、「分かりません」と答えたであろう。ちなみに、高橋良治が千葉県市川市鳴神山遺跡で発掘した土器（第2図1）（現在「鳴神山タイプ」と呼称されている）を明治大学に出講していた山内に鑑定を仰いだところ（1953年）、深いため息をついたのちに、「私にも分からない土器はありますよ」と言ったという（筆者聞き取り）。くだんの土器は阿玉台式特有の細い角押紋を多用しつつも、阿玉台式には稀な筒形を呈し、勝坂式に多く見られる三角陰刻文を施した特異な土器であったのである。

山内清男の戦前における発掘調査は、原則として2m×2mの小グリッドを一人ないし数人でこなすものであった〔諸先学の証言をまとめた大村（2011）参照のこと〕。発掘面積がまだ広くなかった戦前では、山内による研究成果に矛盾を感じるケースは多くなかったと思われるが、1960年代以降の大規模開発に伴う事前調査において、完形土器を多く含む莫大な土器群が出土する状況となり、山内清男が設定した土器型式概念では処理できないものが目立つようになってくる。ここにおよんで、

「従来の型式論には何となく不満に思う面もあり、さらに実際の土器にあたりと一層それが強く感じられ、極端に言えば土器型式に対する既成概念などはない方が良いように思う時もある。」

と公言する研究者も出てきたのである（谷井、1977：29頁）。

まさにそのような研究状況が始まりつつあった、その時（1962年）、高橋良治やその盟友の塚田光が湯浅喜代治（松戸市紙敷在住の在野考古学研究者）邸で実見したのが「中峠式土器」（当初は「Pre 1式土器」と仮称）なのであった（第2図2～3）。

2. 「加曾利E式土器」の由来（山内清男による加曾利E式土器の研究過程）

「中峠式土器」に触れる前に、本シンポジウムの主題である後続の「加曾利E式土器」の研究過程（型式設定者の山内清男による）について少し解説しておく。

おそらく多くの人たちは、加曾利E地点出土の土器が山内清男による「加曾利E式土器」の標準資料となっていると考えていると思われる（かつての筆者も同様であった）。真理の一面ではあるが、山内清男の「加曾利E式」の定義の実際は、もっと厳密なものであった。

山内による当初の「加曾利E」は、「真の加曾利E地点の土器」のみを指し、「口縁部に突起殆ど無く、体部の文様は沈線のみであり、縄紋も斜行するのみで、縦行するものを含んでいない」（山内、1940→1967：25頁）ものであった。この特徴は、山内による大木諸型式の標準資料と対照すると、大木8b式にほぼ並行すると判断される（中村編、1996：巻頭図版103）（本稿第3図参照）。この細別の前後に松戸市上本郷貝塚F地点2号竪穴炉体土器（大木8a式並行：口縁に把手あり、縄紋は縦行、口辺部

に施された隆線脇の沈線は存在しないか極^{ごく}浅い：第4図左参照）と加曾利貝塚D地点（磨消縄紋あり。恐らく大木9式並行）を配置して総称としての「加曾利E式土器」を正式に提唱することになるのである。それまでの「加曾利E」は、「隠語の如く用いられて」きたものに過ぎなかったのであった（山内、1940→1967：25頁）。すなわち山内は、「加曾利E地点」出土の土器を中心として、異なる地点（加曾利貝塚D地点）、異なる遺跡（上本郷貝塚F地点2号竪穴）の細別型式を集めて、総称としての「加曾利E式土器」を確定したのである（従って、山内の加曾利E式の「細別」は、厳密にいうと、「加曾利E式」を「分けた」のではない）。

ちなみに山内が伊東信雄（後年東北大学教授となる）に1929年頃に与えたとされる編年表（中村編、1996：巻頭図版3 本稿第4図右）によると、加曾利E式は3つの階段（「カソリE1・2・3」）に分けられている。これは上記の三つの細別型式の呼称と考えてよいと思われる〔これに関する詳細な考証は、柳澤（1985）および大村（2008）の第Ⅷ章参照〕。この時点では、山内の腹案において加曾利E式の3細別を考えていたのである。では、後年（山内、1969a）に加えられた大木10式並行の「加曾利E4」はどのような経緯で抽出されたのであろうか？ このことについて山内は全く語っていないが、杉山莊平が1963年に発掘した茨城県岩坪貝塚出土土器（杉山、1965）を見ると（第5図左）、山内の大木10式標準資料（第5図右）に酷似する土器（微隆線や橋状把手が施された土器が認められる）が存在する。この資料に山内は強い関心を持ったことが杉山宛のハガキの文面から確認されている（註4）。この土器群こそ、山内（1940→1967）で示唆された加曾利E式の「最も新しい部分」（大木10式並行）に関わる良好な資料で、最後のピース（加曾利E4）が埋まったと評価されたであろう（註5）。

以上、山内清男は、精密な層位的発掘で抽出した大木諸型式との対比から、関東地方（主に千葉県・茨城県）出土の零細な資料をもとに、加曾利E式の小細別型式を抽出してきたのであった。自らの発掘資料が零細だっただけに、正式な細別呼称を加曾利E式に与えることには晩年まで躊躇したのでだろうと想像される。この歯切れの悪さと、提示した図版が「最も古い部分」（大木8a式並行）と「新しい部分」（大木9式並行）に限られていたことが（本書収載の別添大村発表資料参照）、他者による正確な理解を困難なものとする事になった。そして戦後、型式設定者である山内のプライオリティが埋没する原因となり、ひいては下総考古学研究会による「中峠式土器」の時間的位置づけにおいて、大きな桎梏となってゆくのである。

3. 「中峠式土器」の提唱

下総考古学研究会が中峠遺跡の発掘を実施するきっかけとなったのは、千葉県松戸市中峠遺跡0地点（当初は第1地点と呼称）において地元の湯浅喜代治会員が1960年に採集した中期縄紋土器群に高橋良治が注目したことによる。この場所からは、大量の縄紋中期中葉土器群（勝坂式や阿玉台式土器）に混じって、「勝坂式とも阿玉台式とも後続の加曾利E式とも区別出来ない特異な土器」が出土している。炯眼な高橋は、この土器を勝坂式および阿玉台式と加曾利E式の間属する新型式と直観したのであるが層位的裏付けがなかったため、この課題を解決すべく、1963年1月に中峠遺跡第2地点〔先史地表面に形成された小貝塚（後に「第1地点」と改称）〕に鋤を入れたのであった。以後毎年のように年末年始の休暇を使ってこの遺跡の自主発掘が行なわれることとなり、1987年まで実に10次を数えている。この間、くだんの土器およびその類例は、「プレ加曾利E1式」〔略して「Pre 1式」〕。高橋の回顧によれば、左記の傍点部分の数字表記はこうにアラビア数字であったという。実際、高橋（1965）でもアラビア数字表記と

なっている。会のなかではローマ数字を用いるものもいたが（例えば熊谷、1974）、ここでは高橋の用法に従うと仮称され、各次の発掘において特に注意が払われることとなった。調査は表土からスコップで剥ぎ、貝層や住居址覆土は移植ゴテや竹ベラで慎重に掘り下げていった。出土遺物はことごとく出土層位が注記されてポリ袋に収められた。「Pre 1 式」が出土したときには特に観察記録が綿密に行なわれ、第4次調査1号住居址では炉体土器にくだんの土器が用いられ、覆土中からも大量の同種の土器群が検出されている。また「加曾利E I 式」（「いち」はローマ数字。大木8a式・8b式並行の階段を包括した細分。以下同様）期と推定された2号住居址床面の下からは、貼床をはさんでフラスコ状ピットが検出され、その中から完形の「Pre 1 式」土器が出土したのであった。これらの「事実」の積み重ねを踏まえ、「Pre 1 式」は「加曾利E I 式」に確実に先行することが「確定」された訳である。第5次調査では、「加曾利E I 式土器」を炉体土器に持った第1号住居址が、第2号住居址（床面直上からPre1式の半完形土器出土）を「切って」いることが確認された。

「Pre 1 式」の蓋然性をさらに高めるべく試みられた第6次調査でも、1号住居址炉体土器に「Pre 1 式土器」が用いられていることが確認され、覆土・貝層中から出土した多数の土器も、「炉の土器と共通するもの」であったと認識された。またこの住居址の西方に所在する2号住居址の炉体土器も「加曾利E I 式またはそれ以前」と認定され、これにわずかに重複する3号住居址（「加曾利E I 式」期）は、前者の周溝を「切って」いた、という所見が概報（下総考古学研究会、1976a）で提示されている。

このような息の長い学術調査と共同研究を蓄積した上で、1976年、「中峠式土器（Pre 1 式改め）」が自信を持って正式に提示されたのであった（下総考古学研究会、1976）。

4. 下総考古学研究会の外部からの「中峠式土器」批判と会内部における再検討

さて、この十数年におよぶ共同研究において、会の中では、「Pre 1 式」（「中峠式」）は実在の型式として強く認識されており、これに疑いをさしはさむような会員は極めて少数であった（註6）。中峠遺跡調査の日誌を繙いてみても、「Pre 1 式」が「加曾利E I 式」に先行することは自明のことと信じられて観察結果が記載されていた節があるのである。ちなみに「Pre 1 式仮説」を提唱した高橋良治は、1950年代末～1960年代前半当時、低迷を続けていた縄紋中期土器研究の中で傑出した研究者の一人であった。その高橋や、彼の盟友である塚田（註7）の主張に、会の中で正面から反論出来る仲間はほとんどいなかったのが実情である（芝崎孝の証言による）。そうした雰囲気の中で共同研究や中峠遺跡の共同調査が行なわれたのであるから、後年に到るまで、会の中では「中峠式」の存在と位置付けに疑義をさしはさむものはほとんどいなかったのである（筆者も含めて）。「中峠式土器」の正式提唱がなされる前後より、多数の研究者から疑義を寄せられても（田川、1971；新藤、1976；米田、1978；細田、1982；谷井、1987；道沢、1990；黒尾、1995；中野、1995など）、会の中で強い反響はなかったようである〔1979年から例会に参加した筆者の狭い見聞による。筆者入会以前に公表された田川論文（『奈和』8号 1971年 所載）は、著者から主力会員の江森正義に直接献呈されており、それには多くの書き込みがあるので、会の中で話題になったと推定される。小山勲の遺品にも同論文のコピーが残っている〕。

ところで、1977年（第9次調査が行なわれた年）以降、下総考古学研究会の共同研究は「中峠式」に先行する「勝坂式」の研究に本格的にシフトし、中峠遺跡出土遺物の整理も中峠遺跡の発掘も長い間中断されていた。中峠遺跡出土遺物の整理が本格化したのは、1987年において久々に行なわれた第10次調査

とその概報作成を終了し、新たな出土遺物整理体制（各次調査出土遺物を大村宅に逐次搬入して整理）が構築されて以降のことであった。第10次調査を契機に新規加入した三門準・大熊佐智子・西本豊弘等の協力を得て、1995年までに第1次調査報告から第3次調査報告まで比較的短期間に報告書の作成が進んでいった。そして「中峠式」が大量に出土した第4次調査報告書の作成の出発時点で、大内千年・建石徹・高山茂明の各氏を迎えることになり、彼らを交えて「中峠式土器」の再検討が行なわれたのであった。すなわち、1976年の「中峠式土器」研究に全く関わりのない新しい目で当該土器群を検討することになったのである。結果は周知の通り（下総考古学研究会，1998）であるが、以下に結論だけを要約すると、「中峠式」という型式は存在せず、下総考古学研究会が1976年に提示した標準資料は、「中峠0地点型深鉢」「中峠5次2住型深鉢」「中峠6次1住型深鉢」（註8）および中峠0地点型深鉢の仲間（中峠遺跡第4次調査2号住貼床下フラスコ状ピット内出土甕形土器）（註9）という、系譜も分布域も異なる類型群であったということである（第6図）。しかもこれらの共伴事例は存在せず、阿玉台式や勝坂式および加曾利E式に少数伴出するものであることが組織的なデータ蒐集の結果明らかになったのである。

それでは、下総考古学研究会（1976）が提示した「中峠式」の層位事例、「一括資料」はどのように解釈すればよいのであろうか。

まず中峠遺跡第4次調査地点1号住出土の「中峠式一括土器群」は、厳密な型式学的検討を加えた結果、中峠0地点型深鉢（第7図1、4、16）や中峠6次1住型深鉢に類似する土器（同図3）のほか、勝坂V式土器（同図5・6）、阿玉台IV式土器（同図9）、および勝坂式の影響を受けた阿玉台IV式土器（同図10）などで構成されていることが分かった。一部に加曾利E1式土器すらも混在していたことが判明したのである（同図8・14・15）。勝坂式研究や中峠式の再検討で鍛えられた目で見ると、今まで「中峠式一括資料」と見えていたものが全く別の様相を帯びてきたのであった。また、2号住居址は「加曾利EⅠ式」期に所属すると考えられて来たが、出土土器片をすべて検討した結果、加曾利E3式が圧倒的に多く、加曾利E1式土器の破片はごく少量であった。そればかりか、この貼床下から検出されたフラスコ状ピットの上層に磨消縄紋の施された加曾利E式土器の小破片が見出され（第7図右隅）、2号住は加曾利E3式以前ではあり得ないことが確定されたのである（下総考古学研究会，2000）。

第5次調査報告の作成では、「加曾利EⅠ式」の炉体土器を持つ1号住居址が、2号住居址（ほぼ完形の「中峠式土器」が床面直上から出土）を「切って」いる事実の評価が問題とされた（第8図）。1号住居址炉体土器は、口辺に多数の隆線を縦位に貼りつけた特異な土器である（「縦位隆帯貼付文土器」：加曾利E1式の一類型）。この土器の類例の集成と分析を担当した工藤幸尚は、「三上方式」（報告書の記載に従って遺構出土遺物を遺構概念図に配置し、遺物の新旧関係を可視化する方式。旧会員の三上嘉徳が考案したのでこのように会の中では呼ばれている）を使って、くだんの土器の時期を検討した結果、加曾利E1式の「比較的新しい段階に盛行」することが推定されたのである（工藤、2006:116頁）。すると、この事例も「中峠式」が「加曾利E1式」に先行する事例とはみなすことが出来ない。「中峠式」が、加曾利E1（アラビア数字）式の「古い段階」に並行するかも知れないからである。大木8a式・大木8b式並行の「加曾利E式」を「加曾利EⅠ（ローマ数字）式」と包括した、大まかな区分を「中峠式」との新旧関係把握の基準にしたことが大きな問題であったといえよう。

第6次調査では、概報において1号住居址の覆土・貝層中出土土器片は「炉の土器（引用者註：『中峠式』）と共通するものであり、少量の勝坂式・阿玉台式、加曾利EⅠ式を含んでいた」と記載されていた（下

総考古学研究会，1976：14 頁（傍点は引用者）が、改めて出土土器片をすべて点検したところ、加曾利E式が多数を占めており、「中峠式」に相当する土器片は却って少数派であることが分かった。また、「加曾利E I 式またはそれ以前」と認定された2号住炉体土器（下総考古学研究会，1976：15 頁）は、近年の類例との比較によって、加曾利E2式並行（恐らく加曾利E2式の新しい階段。覆土中出土土器片は加曾利E式新が大半であった）の所産とされ、後出と考えられた「3号住」（本報告作成時において、遺構と出土土器片を詳細に検討した結果、都合三軒の住居址が入れ子状に重複していることが判明）が却って古い住居址群〔加曾利E2式（床面出土の「加曾利E I 式」とされた半完形土器は典型的な加曾利E2式であった）およびそれ以前の住居址群〕であることが確定されたのであった（下総考古学研究会，2014）。いずれも調査中あるいは概報作成時において、「中峠式が加曾利E I 式より先行する」という仮説に惑わされ、出土土器の厳密な型式学的検討を怠ってしまったため、遺構の時期決定や新旧関係の判断を誤ってしまったのである。この調査報告に関しては後日談がある。第6次調査報告書が完成したその1年後（2015年）、故高橋良治のご子息から、遺品整理の際に発見された高橋邸所在の中峠遺跡出土遺物を筆者に託されたのである。それは、塚田光が残した第6次調査の調査日誌やメモに記載されていた1号住居址に隣接する「先史地表面に穿たれたピット中」の土器片であった（第6次調査報告作成中には、これらの土器片の大半が所在不明であった）。その中に第9図1～2のような破片があったのである。1は竹管状工具の「背」により「U」字状文と逆「U」字状文を組み合わせた文様が描かれたもので、連弧文系の土器と判断したものである。2は勝坂IV式（縦割区画文系）である。前者は塚田等が「加曾利E I 式またはそれ以前」と認定した2号住炉体土器（第9図3）に類似している（註10）。塚田等は、「先史地表面に穿たれたピット」中からこれらが「共伴」したことを以て、2号住炉体土器（小ピット中出土土器に類似）の時期を「加曾利E I 式またはそれ以前」と認定してしまったのであろう。ちなみに、筆者等の詳細な考証により、この小さな「ピット」は攪乱坑であることが分かっている（大村ほか，2017：219 頁）。

次に、下総考古学研究会（1976）が、中峠遺跡以外の良好な層位事例とした市川市唱行寺貝塚の事例も検討してみよう。覆土貝層中からは「加曾利E I（ローマ数字）式」が出土し、炉体土器には「中峠式土器A（引用者註：「口縁部装飾帯に縄文を使用しない一群」）（25 頁）が埋設されていたとしている（第10図）。しかし、実測図をよく見ると、地紋には撚糸紋が施されているように見える。実際、江森（1964）には、「地文としては撚糸文がみられる」（10 頁）とあるのである。これは「中峠式土器A」の範疇には入らない（上記の「引用者註」にあるゴシック部分の記述参照）。層位的検討は的確であっても、型式学的検討がやや緩やかであったことから判断を誤ったのであろう。

5. 山内清男の「加曾利E式」の概念（『日本先史土器図譜 第Ⅷ輯・Ⅸ輯』の図版から読み取る）

最後に、この土器型式の設定をし、豊富な図版を使って加曾利E式の解説をした（十分ではなかったけれども）山内清男の加曾利E式に関わる概念を「図譜」（第Ⅸ輯）の写真図版から探してみたい。

この「図譜」の分析的研究の先鞭をつけたのは、塚田光（下総考古学研究会，1976）（註11）である。少し長くなるが、関係する部分を以下に転載する。

「検討するにあたっては、まず写真の各部分について、詳細に観察し、文様の種類・施文手法・施文具・施文部位・順序などを抽出して、それに統計表・記号化などの操作をほどこして、各型式（引用者註：勝坂式と加曾利E式）の異同を比較した。また解説文についても一言一句、言外の意までくみとることに務めてみた。（中略）

勝坂式土器は大きくわけて、地文に縄文が施文されている部分（主に下半部）と縄文が施されない部分（主に上半部）がある。隆線や沈刻文による装飾は無文部に施され、隆線の上にはさらに刻文が加えられ、装飾効果をたかめている。

一方加曾利E式（古）は、全面に縄文が施され、その上に隆線を貼付している。しかし隆線の上には装飾はない。

勝坂式土器が古く、加曾利E式が新しいという事実の上に立って、両者の相異を説明すると、土器表面の無文部は減少し、器面全体に縄文が施されるようになる。これに反して、隆線上の装飾は加曾利E式では、極度に減少し、多くの場合消滅する。図示した2個体の土器（引用者註：本稿第11図の1と2）を比較するならば、土器上半部の地文は無文と縄文で、縄文の有無という観点に立てば全く逆の現象を示している。また隆線上の文様という点においても逆である。

勝坂式にないものは加曾利E式にはあるし、あるものはない。複雑多岐にわたる両式土器の差異を簡潔に述べれば、以上のようなことになる」（24～25頁）。

すなわち、両者は完全に断絶しているものであり、ここにこそ中間型式としての「中峠式土器」介在の余地がある、というのが塚田の主張であった。勝坂式との比較から、「加曾利E」の特徴を見事に浮かび上がらせていると言えよう。ただし、文様要素の特徴はその通りであるが、「加曾利E式」の系統について、文様構成の観点から触れていないことが惜しまれる。第11図（3と4）を見て頂きたい。3は千葉県市川市姥山貝塚出土土器である。地紋に縄紋を施し、加飾のない隆線を貼付してくずれた方形の区画を構成している。〈地紋＋加飾のない隆線〉という点で加曾利E式の範疇に入るが、くずれた方形の区画を有するという点で、勝坂式（V式）の伝統を引くものである。次に4を見て頂きたい。神奈川県橘樹郡橘村（現川崎市）下田西貝塚発見の土器という。口辺部に隆線による横S字状文（?）が配され（隆線上には一部粗いキザミが見える）、地紋には太目の集合沈線が施されている。頸部には無紋帯があり、以下は縦行する縄紋（山内、1940→1967：26頁）を地紋として屈曲する隆線の懸垂文が施されている。この文様構成は阿玉台式のそれを踏襲しているといえよう（註12）。「勝坂・阿玉台→加曾利E」（山内、1937：附表）の編年観をそのまま写真図版で示しているかのようである。姥山貝塚出土の加曾利E式（古）と大木8式の折衷土器（本稿第1図1）を「図譜」から外した理由はここにもあったと思われる。

すなわち、「加曾利E式」は勝坂式と阿玉台式の両者の特徴を継承した、関東地方特有の土器型式であることをこの写真図版から強調していると推定されるのである。中期後葉初頭に、大木式の影響を強く受けながら（縄紋が優勢になったこと）、なお在地の勝坂式・阿玉台式の伝統を強く持った土器型式〔縦行する縄紋（勝坂式の特徴：第11図1参照）が初期に残存すること、体部に屈曲する懸垂文が縦位に展開すること（阿玉台式の特徴）等〕が「加曾利E式」であることを意識していたのではあるまいか。この点は山内の解説がないので、想像でしかないのであるが、「図譜」写真図版全般を眺めていると、山内は土器型式の「系統」ということを強く意識しながら編集していることが推定されるのである（註13）。

山内による厳密な概念定義がほどこされた「勝坂式」と「加曾利E式」の間に、異なる規準（異型式折衷）の「中峠式」を挿入しようとしたことが、結果的によい成果を挙げられなかった（山内清男のパラダイムの中では）主な原因と思われてならない。しかし、山内があえて除外した所属不明の折衷型式土器群は、昨今の大規模開発の進行に伴う広域発掘により大量に出土していることも事実である。そうした土器群にも目配りし、その位置づけや生成の背景を追究する必要があるように思われる。「中峠式土器」研究は、その意味で21世紀の研究動向を先取りしたものだと評価することも出来よう。

おわりに

以上、「中峠式土器」の提唱からその撤回の過程と根拠について解説して来た。「中峠式土器」が山内土器型式学の規準から外れていたこと、および山内清男による加曾利E式細分の定義に関する理解が十分ではなかったことが、「編年」という視座から見ると、よい成績を挙げられなかった主な原因であった。さらに加えるならば、「Pre1式」仮説のバイアス（先入観）が強すぎたことが、発掘調査時における判断と解釈を誤らせる結果となったと思われる（大村、2016）。

下総考古学研究会（1976）の研究手法は極めて手堅いものであったし、「Pre1式」を証明するために中峠遺跡において長期の自主発掘に取り組み、粘り強い討議を行った諸先輩の情熱は、日本考古学史を眺めても稀有なことである。下総考古学研究会の現役会員たちが畏敬の念を抱いている所以である。

科学において研究の失敗は決して恥ずかしいことではない。考古学では新たな発見で、「通説」が改められることは、珍しいことではないのである。むしろ長期間にわたって大切に保管してきた発掘資料や研究成果の検証を後進たちに許容し、潔く自らの失敗を認めた諸先輩方の度量の広さを称えたい。なお、筆者等による「中峠式土器」の丹念な再検討結果が公表されているにも拘わらず、依然として事前発掘調査の報告書において土器型式としての「中峠式」を使用する研究者が、あとを絶たない。縄紋中期中葉末～後葉初頭における多様な折衷土器の記載に当たって、当該期の不明土器群を「中峠式土器」と一括して記載を進めることが出来るからである。本稿がそうした風潮に対する歯止めとなることを希望する。

註

- (1) 共同研究の指導的立場にあった塚田光によると「中峠式土器」の研究は、それまでの縄紋土器型式の設定が破片のみで行なわれたり、十分な資料提示がなされていなかったり、型式設定の根拠もあいまいで検討する文献もない。数枚の写真とロコミで流布している（暗に山内清男による一連の研究成果を指しているものと推定される）、という状況に対する反発から意識的に取り組まれたものであった（下総考古学研究会、1977：107～108頁）。
- (2) この研究は、まだ高橋良治・江森正義・小山勲といった「中峠式土器」研究を推進した主力会員が存命していた時期に、筆者および大内千年・建石徹・高山茂明が中心となって進め、研究集会で上記三者の了承をとったものである。
- (3) 生物学者の馬渡峻輔によれば、「分類体系」を作るためには、分類単位が「等価」であること、「離散的存在」であること、「規準、尺度はただ一つ」であることが基本的な約束事であるという（馬渡、1994：7頁）。山内は生物学に相当入れ込んでいたので、こうした「約束事」は頭に刷り込まれていたかもしれない（大村、2008参照）。
- (4) 橋口（1983）によれば、岩坪貝塚の概報を杉山が山内宛に献呈したところ、山内からの年賀状において、「大変面白い資料で比較研究に力めて居ます」と謝辞があったという（72頁）。
- (5) 岡本勇による吉井城山貝塚の報告（岡本、1963）を山内が読んだかどうかは、まだ確認できていない。
- (6) 「中峠式土器」の研究が完成する直前、熊谷肇や芝崎孝による疑義が提示されたことがあった（熊谷、1974）。その詳細は大村（2023）参照のこと。
- (7) 塚田光は、「Pre 1式」を、勝坂式・阿玉台式および加曾利E式の特徴を併せ持つ「漸移的型式」（存続時間の極めて短い中間型式）と想定し、一集落における「just moment」における住居址の分布を把握できる絶好のツールとして注目していた。彼は、同一型式内で複数の堅穴住居址が重複する事実を前に頭を悩ませていたのである（塚田、1969：20頁）。
- (8) この呼称を採用した経緯については、大村（1998）を参照のこと。日本考古学一般の概念から言えば、モンテリウスの Typus（テュープス）（大村は学史上の根拠に基づき「類型」と訳す）（大村、2014；2022a）に相当するが、山内は「土器型式」の下位区分として「類型（カテゴリー）」という概念を既に提示している（山内 1969b：86頁）ので、混同を避け

る意味でこのような呼称を採用した。当該期にはどの土器型式にも属さない折衷土器が多数存在するからである。

(9) 下総考古学研究会（1998）では、中峠0地点型深鉢の仲間という位置づけを取りあえずしておいたが、房総半島における勝坂式土器の研究（下総考古学研究会、2003）の深まりの中で、「在地化した勝坂式」と位置づけを変更した。

(10) 塚田の遺品の中に、中峠遺跡第6次調査地点2号住炉体土器と件の土器片（小ピット出土）の写真が一枚の台紙に貼付された図面が残されている（大村、ほか2017：220頁に掲載）。

(11) この論文には個人のクレジットが入っていないが、文体は塚田光のものである。同じような内容は下総考古学研究会の1979年2月例会にて、「山内清男著『日本先史土器図譜 勝坂式土器』について」と題し、塚田が発表している。

(12) 頸部無紋帯を持つ加曾利E式を「加曾利E2式」と捉える考え方もある（鈴木、1981など）が、山内（1940→1967:25頁）はこの土器を「最も古い部分」と捉えているので、ここでは山内の観点に従って解釈している。

(13) このことは塚田が下総考古学研究会の1979年2月例会で指摘していた。

参考・引用文献（分野別・年代順）

〔学史関係〕

- 伊東信雄 1929「下総上本郷貝塚の堅穴について」『史前学雑誌』1巻1号
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」先史考古学会
- 山内清男 1940→1967『日本先史土器図譜』再版・合冊 第Ⅷ輯 第Ⅸ輯 先史考古学会
- 岡本 勇 1963「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器（二）」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』7 横須賀市博物館
- 杉山莊平 1965「茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報『史観』第72冊 早稲田大学史学会
- 山内清男 1969a「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』224号 東京国立博物館
- 山内清男 1969b「縄文文化の社会 縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史 第1巻』学習研究社
- 谷井 彪 1977「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察」（前）『信濃』29巻4号 信濃史学会
- 鈴木保彦 1981「加曾利E式土器」『縄文土器大成 2 中期』講談社
- 橋口尚武 1983「加曾利E式土器の研究史的考察－特にⅢ・Ⅳ式土器を中心として－」『考古学雑誌』69巻1号 日本考古学会
- 柳澤清一 1985「加曾利E式土器の細別と呼称（前編）」『古代』80号 早稲田大学考古学会
- 中村五郎 編 1996『画竜点睛－山内清男先生没後25年記念論文集－』同刊行会
- 大村 裕 2011『縄紋土器の型式と層位－その批判的検討－』六一書房

〔下総考古学研究会関係〕

- 高橋良治・江森正義・湯浅喜代治 1964「千葉県・中峠第1地点貝塚の土器とその類例について」『考古学手帖』23
- 江森正義 1964「千葉県市川市唱行寺貝塚の土器について」『下総考古学』1号
- 高橋良治 1965「阿玉台式土器の研究の現状と課題」『考古学手帖』25
- 塚田 光 1969「下総考古学研究会のあゆみ」『考古学研究』16巻2号 考古学研究会
- 熊谷 肇 1974「寸評 「Pre I」は本当に「Pre I」であったか」『研究メモ』（孔版）No.115 下総考古学研究会
- 下総考古学研究会 1976「中峠遺跡発掘調査概要」「中峠式土器の研究」『下総考古学』6号
- 下総考古学研究会 1977「シンポジウム●下総考古学研究会 地域研究と考古学－研究共同体をめざして－」『どるめん』No.14 JICC 出版局

山内清男の加曾利E式土器と「中峠式土器」
大村 裕

大村 裕 1998「埼玉県台耕地遺跡第34号住居跡「第Ⅵ類b種土器」及びその類例の呼称について」『第11回 縄文セミナー
中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会

下総考古学研究会 1998「中峠式土器の再検討」『下総考古学』15号

下総考古学研究会 2000「千葉県松戸市中峠遺跡第4次調査報告」『下総考古学』16号

下総考古学研究会 2003「房総半島における勝坂式土器の研究」『下総考古学』18号

下総考古学研究会 2006「千葉県松戸市中峠遺跡第5次調査報告」『下総考古学』19号

工藤幸尚 2006「中峠遺跡第5次調査地点1号住居址炉体土器の位置付け」『下総考古学』19号

下総考古学研究会 2014「千葉県松戸市中峠遺跡第6次調査報告」『下総考古学』16号

大村裕ほか 2017「中峠遺跡第6次調査地点1号住居址に隣接する「ピット」出土の土器群について」『下総考古学』24号

大村 裕 2023「下総考古学研究会の60年ー在野考古学研究集団の軌跡ー」『下総考古学』別冊

〔「中峠式」を批判する主な論考・報告書〕

田川 良 1971「縄紋中期、土器型式に関する予察（Ⅰ）ーいわゆるPreⅠ式に関してー」『奈和』8号 奈和同人会

新藤康夫 1976「加曾利E式土器細分の再検討」『考古学雑誌』62巻3号 日本考古学会

米田明訓 1978「曾利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古学会誌』30号 長野県考古学会

細田 勝 1982「第5章 第4節 Ⅶ期、Ⅷ期 中峠式土器」『研究紀要 1982 縄文中期土器群の再編』埼玉県埋蔵文化財
調査事業団

谷井 彪 1987「加曾利E式土器における口縁部文様と形態の系譜」『柳田敏司先生還暦記念論文集 埼玉の考古学』
新人物往来社

道澤 明 1990『東・北長山野遺跡』北長山野遺跡調査会

黒尾和久 1995「縄文時代中期集落遺跡の基礎的検討（1）ー時間軸の設定とその考え方についてー」『論集 宇津木台』
第1集 宇津木台地区考古学研究会

中野修秀 1995『居合台遺跡』山武郡市文化財センター

〔山内清男の方法論に関わる著作・論考〕

大村 裕 2008『日本先史考古学史の基礎研究ー山内清男の学問とその周辺の人々ー』六一書房

大村 裕 2014『日本先史考古学史講義ー考古学者たちの人と学問ー』六一書房

大村 裕 2022a「山内清男の方法論ー山内論文の読み方ー」『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』23号

大村 裕 2022b『続 日本先史考古学史の基礎研究ー山内清男の学問とその周辺の人々ー』六一書房

〔その他〕

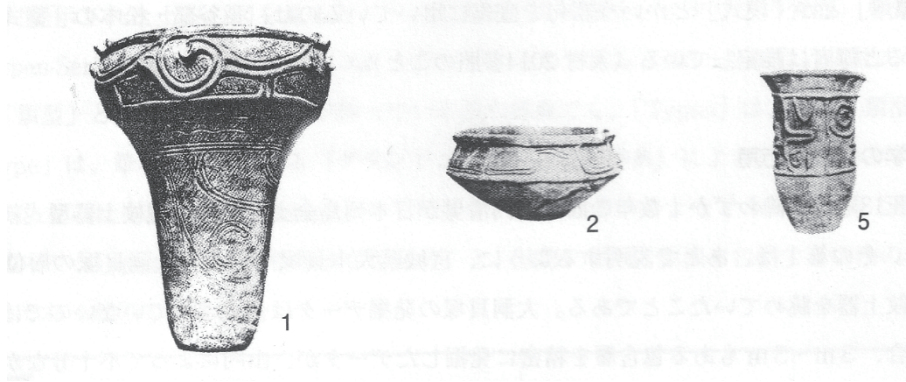
杉原莊介 1940「下総姥山に於ける私の採集品」『考古学』11巻6号 東京考古学会

高橋良治 1959「千葉県・鳴神山貝塚の土器」『考古学手帖』10

馬渡峻輔 1994『動物分類学の理論ー多様性を認識する方法ー』東京大学出版会

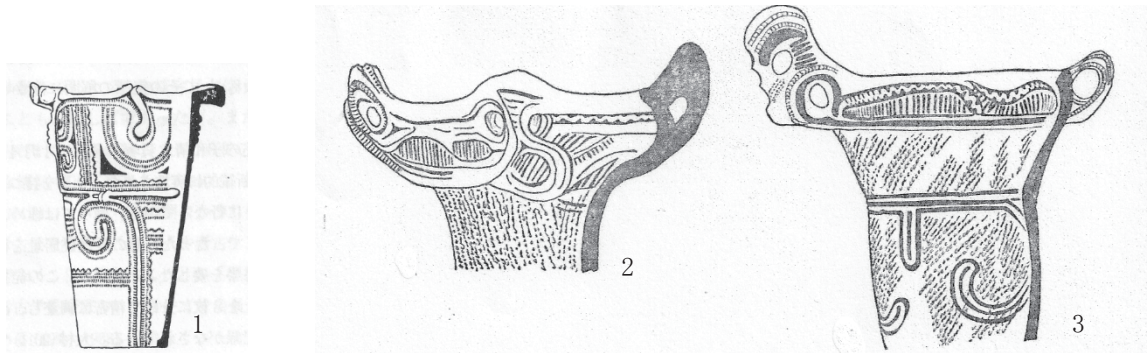
黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム
縄文中期集落研究の新地平〔発表要旨・資料〕』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会

大村 裕 2016『旧石器捏造事件の研究』（鳥影社2010年）の感想『アルカ』第5号 株式会社アルカ



第1図 市川市姥山貝塚出土土器（杉原、1940より抜粋）

1は『日本先史土器図譜 第IX輯』の図版掲載から漏れた土器。2・5は掲載。

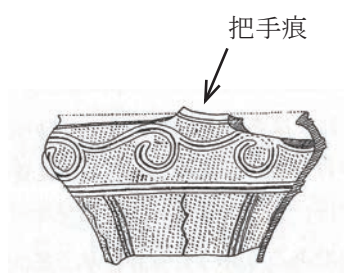


第2図 1：鳴神山遺跡出土土器（高橋、1959）、2～3：中峠遺跡0地点出土土器（高橋ほか1964）



第3図 山内清男・大木8b式標準資料の一部（中村編、1996による）

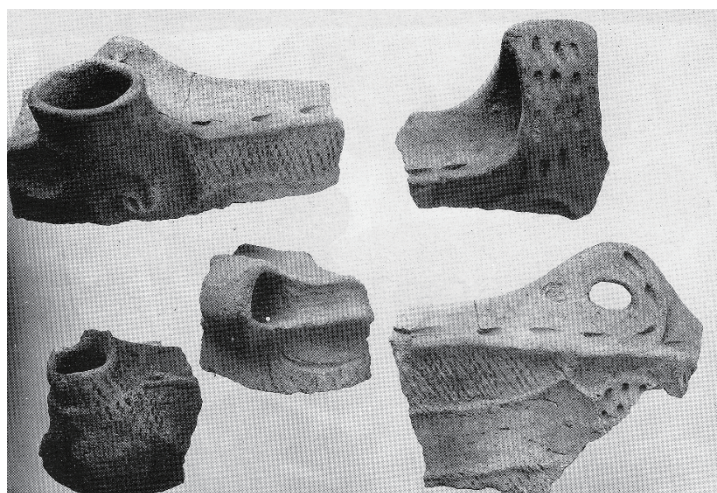
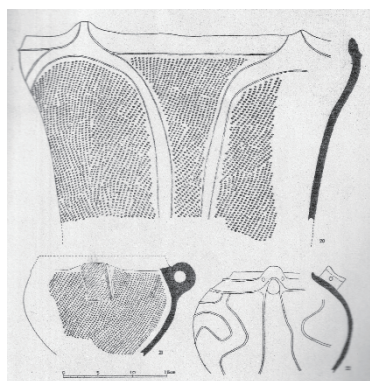
ただし、上段左端の土器は8b式ではない可能性あり（大村、2008 参照）



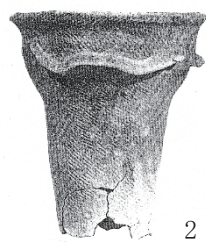
関東	陸前	陸奥	
オタマダイ	(ダイギ) 6	(ナカイカイツカ)	IIa
	7		b
カソリ E1	○		
2	8		IIIa
3	9		b
	10 = 境 1		

(1929 年頃作製)

第4図 上本郷貝塚F地点2号竪穴炉体土器（伊東、1929 を一部改変）（左）と山内が伊東に1929年頃に与えた仮編年表（中村編、1996 に基づき大村清書 中期のみ抜粋）（右）



第5図 岩坪貝塚出土土器（杉山、1965 による）（左）と山内・大木10式標準資料の一部（中村編、1996 による）（右）
（微隆線、橋状把手の存在、という共通点に注意）



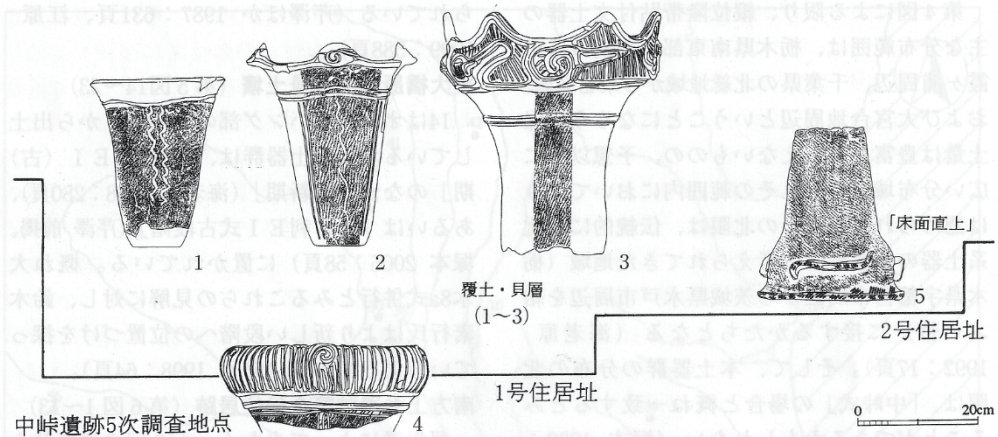
第6図 「中峠式」各型深鉢など

1は中峠0地点型深鉢、2は中峠5次2住型深鉢、3は中峠6次1住型深鉢、4は中峠4次調査地点2号住居址貼床下のフラスコ状ピット出土土器（在地化した勝坂式）

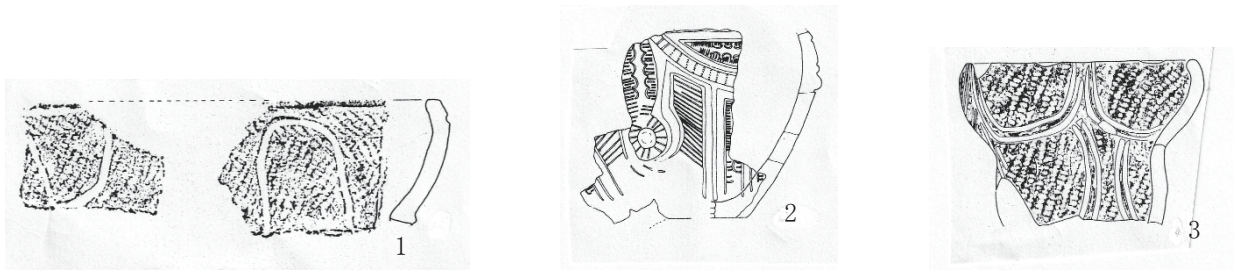


第7図 中峠遺跡第4次調査地点1号住出土「一括」出土土器群と2号住貼床下

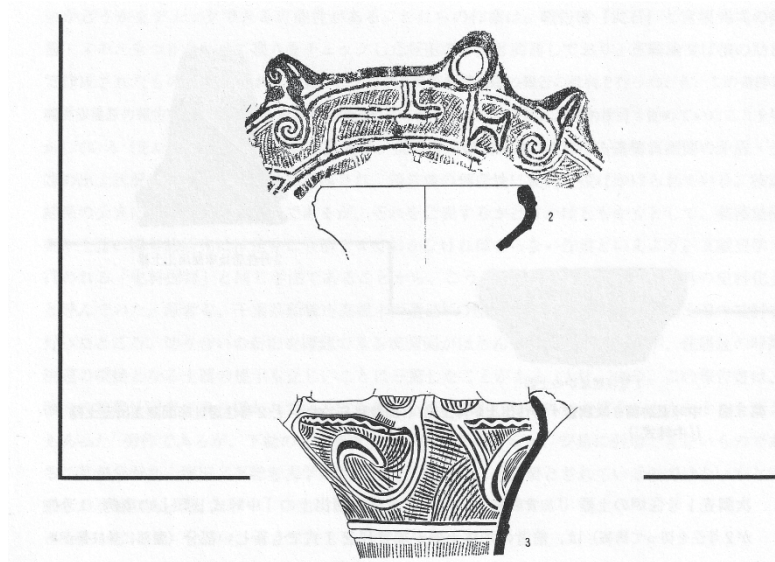
フラスコ状ピット及び出土土器（右隅） 下総考古学研究会（2000）を改変・編集



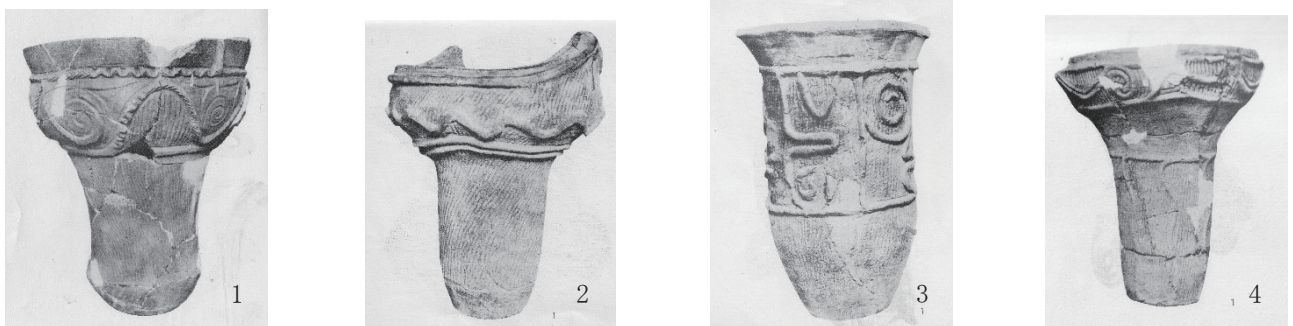
第8図 中峠遺跡第5次調査地点1号住と2号住の重複状況 工藤（2006）による



第9図 中峠遺跡第6次調査地点1号住に隣接する小「ピット」出土の土器片（1～2）
と2号住炉体土器（3）（1と3に施された弧状の沈線の存在に注意）



第10図 市川市唱行寺貝塚発見の竪穴住居址炉体土器（「中峠式」）と覆土貝層出土の加曾利E I 式
（江森、1964 の記載の概念図）



第11図 山内清男『日本先史土器図譜 第七輯・第八輯』所載の勝坂式（1）と加曾利E式（「最も古い部分」）（2～4）（抜粋）